

一般歯科外来受診高齢患者の口腔の健康に関する意識調査

○朝田 和夫¹, 吳 明憲¹, 朝田 真理¹, 竹川ひとみ¹, 遠藤 眞美², 野本たかと²

¹ 医療法人社団 進和会 あさだ歯科口腔クリニック

² 日本大学松戸歯学部 障害者歯科学講座

諸言

近年、歯科外来を受診する高齢者が増加している。高齢歯科外来患者はう蝕、歯周病といった歯科疾患だけでなく口腔や顎顔面領域の悩みなどを抱えているが、患者自身がそれらの困りごとに関して歯科に相談して良いのか悩んだり、実際は相談したいと思っても控えている場合もある。しかし、それらの悩みの中には、歯科的介入によって改善が見込まれる内容が含まれている。そこで、今回、歯科外来高齢患者の口腔周囲に関連した困りごとを知り、将来の高齢者歯科医療におけるニーズを把握することを目的に本調査を実施した。

方法

対象は、う蝕、歯周治療、欠損補綴治療を希望してあさだ歯科口腔クリニックを受診した65歳以上の患者50人を対象とした。

方法は、独自に作成した「お口の健康に関する調査票」を受診時に記入してもらい、その後、RSST(反復唾液嚥下テスト)、舌圧(JMS舌圧測定器:GC, 東京)およびオーラルディアドコキネシス(スマートフォンアプリ「くちけん」:桐生市歯科医師会)の測定を行った。調査票の回答は“非常にある”、“少しある”を“ある”として解析した。

なお、本研究は日本大学松戸歯学部倫理委員会の承認を得て実施した(EC-15-013)。



JMS舌圧測定器

スマートフォンのアプリ「くちけん」

結果

1. 対象者の属性

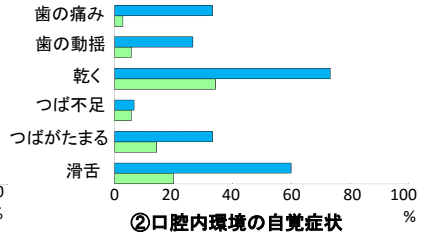
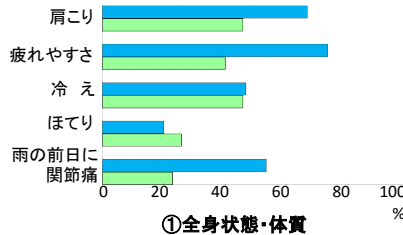
平均75.6±6.5歳(65~90歳)で、男性22人、女性28人であった。

2. 食事に関する困りごとの有無と症状

15人(30%)が食事に関して困っていると回答した。

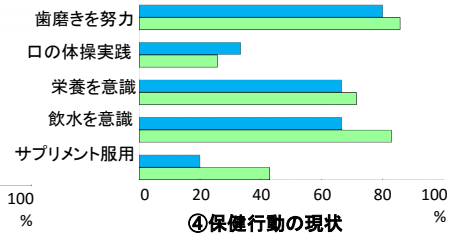
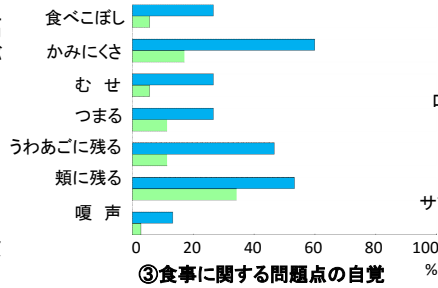
① 全身状態・体質

食事困っている群では、肩こり、疲れやすさ、雨の前日の関節痛を感じている割合が多かった。



② 口腔内環境の自覚症状

口腔内に関して、口が乾くとの回答が最も高かった。食事困っている群では、口が乾く、滑舌の悪さを自覚している者が60%以上に認められた。



③ 食事に関する問題の自覚

平均食事時間は、食事困っている群で19.6±8.5分、困っていない群で22.0±9.7分であった。食事困っている半数がこの1年で食事時間延長を自覚し、全項目で困っていた。

④ 保健行動の現状

食事困っている群に対して、困っていない群は積極的に様々な保健行動を行っていた。

⑤ 口腔内状態および口腔機能評価

食事困っている群のRSST、平均舌圧、オーラルディアドコキネシスの結果から食事に困っていない群に比較して口腔機能低下が認められた。

歯数	⑤ 歯 数	
	食事困っている	食事困っていない
0	1	3
1~9	4	7
10~19	5	15
20~	5	10

	⑤ 口腔機能評価結果	
	食事困っている	食事困っていない
RSST2回以下	3人	1人
平均舌圧	25.6±10.0	28.2±7.6
平均オーラルディアドコキネシス		
pa	50.5±9.8	9.8±8.2
ta	50.8±9.6	9.6±7.1
ka	48.0±10.0	51.6±7.0

考察

本研究の対象者は一般的な歯科治療を希望して受診した患者であるが、約30%が食事に関して困っていた。食事困っている群では、かみにくさ、食物がうわあごや頬に残ることなどにくわえ、半数以上が口腔乾燥や滑舌の悪さを自覚していた。これらの食事困っている群で多く認められた症状は、歯科治療や歯科保健指導などで対応できる内容であると同時に、改善によって信頼関係の構築や歯科治療効果を間接的に向上する要因と考えられる。歯科臨床場面で「食事困っていることはありませんか」と患者と対話することは困難ではない。その一言をかけることで患者の機能低下を見逃すことなく治療へつなげられる可能性が示唆された。今後は主訴だけにとらわれるのではなく、口腔環境や機能に関する症状を理解する努力しながら治療を行うことによって、多様化している高齢者歯科医療の質の向上を図れるのではないかと推察された。